

服部鹿次郎博士の薨去を悲しむ

昭和五年十一月七日、九州帝國大學名譽教授正三位勳三等工學博士服部鹿次郎先生、忽然として薨せらる。いまその訃に接して哀悼極まりなきものあり、謹しんで茲に弔意を表する次第である。

先生福岡縣の人、明治元年四月二十九日朝倉郡宮野村に生れ、其家は酒造を業とせらる。二十五年東京帝國大學工科大学土木工學科を卒へ、内務省及東京府技師に歴任され、二十九年東京帝國大學工科大学助教授に任ぜらる。

明治三十三年歐米各國に留學を命ぜられ三十六年歸朝、東京帝國大學工科大学教授に任ぜられ三十七年工學博士の學位を授けらる。

明治四十二年に至り九州帝國大學工科大学創立の議起るやその準備委員を仰付けられ四十四年九州帝國大學工科大学教授に任ぜられ、大正三年より七年に至るまで同工科大学長に補任せらる。

大正十年六月歐米各國に出張を命ぜられ十年十二月歸朝昭和三年七月依願本官を免ぜられ、九州帝國大學名譽教授の名稱を授けらる。此間帝國鐵道廳及鐵道院技師を兼任せられしことあり、昭和五年十一月七日病を得て薨去せらる。行年六十三歳。

服部先生の思出

服部博士は酒を愛してゐられたが、晩年腎臟を病んでからは之も節せられてゐた。

博士が學生を愛する事は有名なもので、正月になると自宅で度々歌留多會を催した、冬期休暇中の學生で福岡に居残つてゐるものは、此の歌留多會を大變楽しみとしてゐた。其時は必ず博士は自ら贖人になる、而して一同と家族的な食事をする、各教授の家

族の人達も學生と俱に會して打とけた催であつた。

博士は學者であるから一度壇上に立つと犯す可らざる威嚴を以て講演されたが、壇上を下ると別人の様に温厚な好々爺であつた。一見村夫の様な博士ではあるが、學問に対する尊嚴な態度は格別であつた。

學問と同時に人間を作るのが博士の目的であつたらしい、博士が九州大學に於て學生に試験をしない

と云ふ事は有名な話である。學生は試験のない事を非常に喜んでゐた。試験はしないが一學期一回位宿題を出された其問題は『スパイキ』に就てと言ふ様なもので、曾て習つた講義にもない様な事を出される、平凡な問題ではあるが學生は一寸困つて参考書を盛んに探つて論文を纏めると云ふ有様であつた。

九州帝國大學の創立委員であり、創立以來ゾット鐵道及び施工法を擔當されてゐたが卒業した學生に對しては、法律と經濟とを勉強する様にすすめられたものである。(谷井陽三郎氏談)

○

服部先生の思出としては、古いプリントなどを出して講義をされたので、其上に先生の風彩がツミであつたから、何もかも質素堅實な感化をうけてゐる。先生は學生を眞に自分の子弟の如く愛された、學生も服部先生に對して慈父に對する如く特別な親みを持つてゐた。(十一月二十六日太田稔氏談)



故服部鹿次郎博士